

婦人十一題

泉鏡太郎

青空文庫

いちぐわつ
一月

うまし、かるた會くわいいそに急ぐ若き胸むねは、駒下駄こまげたも撒水まきみづにすべにこひ戀こひ
 うた おも の歌を想ふにつけ、夕暮ゆふぐれの線路せんろさへ丸木橋まるきばしの心地こゝちやすらむ。
 まつ な 松を鳴らす電車でんしやの風かぜに、春着はるぎの袖そでを引合ひきあはす急せき心こころも風情ふぜいなり。
 やがてぞ、内賑うちにぎやかに門もんのひそめく輪飾わかざりの大玄關おほげんくわんより、絹き
 ぬたび 足袋かろを軽く高廊下たからうかを行ゆく。館やかたの奥おくなる夫人ふじんの、常つねさへ白鼈しろべ甲かふ
 しんじゆ 眞珠ちりばを鏤ブローチめたる毛留つるして、鶴はだの膚くに、孔雀くじやくの装よそほひにのみ馴な
 たま はる れたるが、この玉たまの春はるを、分わけて、と思おもふに、いかに、端近はしぢかの
 ちや ま 茶ちやの室まに居迎ゐむかふる姿すがたを見れば、櫛くしまき卷まきの薄化粧うすげしやう、縞銘仙しまめいせんの半は

襟つきに、引掛帯して、入らつしやい。眞鍮の茶釜の白
 鳥、出居の柱に行燈掛けて、燈紅く、おでん爛酒、甘酒
 もあり。

——どツちが好いと言ふんですか——
 ——知らない——

にぐわつ
 二月

都なる父母は歸り給ひぬ。舅姑、知らぬ客許多あり。附添ふ侍
 女を羞らひに辭しつゝ、新婦の衣を解くにつれ、浴室颯と白
 妙なす、麗しき身とともに、山に、町に、廂に、積れる雪の影

も映さすなり。此このとき時、われかへこゝろに返る心、しかも湯氣ゆげの裡うちに恍くわうこつ惚こつ
 として、彼處かしこに鼈べつつかふ甲くわがの櫛し笄がの行方ゆくへも覺おぼえず、此處こゝに亂みだ箱ばこの
 緋縮緬ひぢりめん、我わが手てにさへ袖そでをこぼれて亂みだれたり。面おもて、色染いろでまんぬ。
 すがたみおもかげひとへはなびらうすくれなる
 姿見すがたみの倂おもかげは一重ひとへの花はな瓣はな薄うす紅あかに、乳ちを押おさへたる手ては白しろくか
 さなり咲さく、蘭湯らんたうに開ひらきたる此この冬ふゆ牡丹ぼたん。蕊しべに刻きざめるは誰たが
 名なぞ。其その文字もじ金色こんじきに輝かがや
まへがみのつめたやいば前まへ髪がみに冷ひやき刃やいばあり、窓まどを貫つらぬくは簾すだれなす氷柱つららにこそ。カチリと
おとのを前まへ髪がみに冷ひやき刃やいばあり、窓まどを貫つらぬくは簾すだれなす氷柱つららにこそ。カチリと
おと音ねして折をつて透すかしぬ。人ひとのもし窺うかがはば、いと切せめて血ちを迸ほとばしらす
あひくちのおどろ首あひくちとや驚おどろかん。新婦よめぎみは唇くちびるに含ふくみて微笑ほゝゑみぬ。思おもへ君きみ……式しき
くこんのさかづき九く獻こんの盞さかづきよりして以このかた來はじ、初はじめて胸むねに通とほりたる甘あまく清すゞき露しづゆなりし
 を。——見みたのかい——いや、われ聞きく。

さんぐわつ
三 月

浅蜷あさりやア浅蜷あさりの剥身むきみ——高臺たかだいの屋敷町やしきまちに春寒はるさむき午後ごご、園生そのふ
 一人庭下駄ひとりにはげた つまだを爪立つまだつまで、手てを空そらさまなる美よき女むすめあり。樹々き々の
 枝えだに残のこの雪ゆきも、ちらくくと指ゆびの影かげして、大おほいなる紅こうじつ日に、雪ゆきは
 薄うすむらさき紫またもとの袂ひを曳ひく。何なんに憧あこが憬がるゝ人ひとぞ。歌うたをよみて其その枝えだの紅こうば
 梅いの苔つぼみを解とかんとするにあらず。手鍋てなべ提さぐる意いき氣げきに激げきして、所しよ
 帯たいの稽古けいこに白魚しらうをの造める也なり。然しかも目めを刺さすがいぢらしとて、
 ぬきとむるは尾をなるを見みよ。絲いとの色いろも、こぼれかゝる袖そで口くちも、
 繪ゑの篝かざり火びに似にたるかな。希ねがくは針はりに傷きずつくことなかれ。お嬢ぢやう

様さま これめせと、乳母うばならむ走り來て捧さぐるを、曰いはく、エプロン
 掛かけて白魚しらうをの料理れうりが出來できますかと。魚うをも活いくべし。手首てくびの白しろさ
 更さらに可さんずんばかり三寸。

しぐわつ
四月

舳みよしに肌はだぬぎの亂みだれ姿すがた、歌妓うたひめがさす手てひく手てに、おくりの絃いとの
 流ながれつゝ、花見船はなみぶね漕こぎつるゝ。土手どての霞かすみ暮れんとして、櫻さくらあか
 るき三みめぐりあたり、新あたしき五ご大力だいきの舷ふなばたの高たかくすぐれたるに、
 衣紋えもんも帯おびも差さし向むかへる、二人ふたりの婦をんなありけり、一人ひとりは高かう尚しやうに圓ま
 鬚げゆひ、一人ひとりは島田しまぢやまぢ艶也。眉まゆ白しろき船頭せんどうの漕こぐにまかせ、蒔繪まきゑの

調度てうどに、待乳山まつちやまの影かげを籠こめて、三日月みかづきを載のせたる風情ふぜい、敷波しきなみ
 の花はなの色いろ、龍たつの都みやこに行く如ごとし。人ひとも酒さけも狂くるへる折をりから、ふと打ち
 すましたる鼓つづみぞ冴さゆる。いぎ、金銀きんぎんの扇あふぎ、立つて舞まふよと見みれ
 ば、圓鬢まげの婦をんな、なよやかにすらりと浮うきて、年下とししたの島田しまだの鬢びんの
 ほつれを、透すかし彫ぼりの櫛くしに、搔撫かいなでつ。心こころに憎にくし。鐘かねの音ねの傳つた
 ふらく、此この船ふね、深川ふかがはの木場きばに歸かへる。

ごぐわつ
五月

五月雨さみだれの茅屋かやぶ雫づくして、じとくと沙汰さたするは、山やまの上うへの古ふるやし
 社ろ、杉すぎの森もりの下した闇やみに、夜よなく黒髪くろかみの影かげあり。呪詛のろひの女をんなと

言ふ。かたの如き悪少年、化鳥を狙ふ犬となりて、野茨亂れし
 咀道を要して待つ。夢か、青葉の衣、つゝじの帯の若き姿。雲
 暗き山の端より月かすかに近づくと、獲ものよ、虐げんとすれば、
 その首の長きよ、口は耳まで裂けて、白き蛇の紅さしたる面ぞ。
 キヤツと叫びて倒るゝを、見向きもやらず通りしは、優にやさし
 き人の、黄楊の櫛を唇に銜へしなり。うらぶれし良家の女の、
 父の病氣なるに、夜半に醫を乞へる道なりけり。此の護身の術
 や、魔法つかひの教にあらざ、なき母の記念なりきとぞ。卯の花
 の里の温泉の夜語。

ろくぐわつ
六月

すそのけむながなび、小まつばらもやひろなが流れて、夕暮の幕更に
 裾野の煙長く靡き、富士山に開く時、其の白妙を仰ぐなる前髪清き夫人あり。肘
 を軽く窓に凭る。螢一つ、すらりと反對の窓より入りて、細き
 かげまみ見る間に、汗埃の中にして、忽ち水に玉敷ける、淺葱、
 藍、白群の涼しき草の影、床かけてクシヨンに描かれしは、
 螢の衝と其の裳に忍び棲に入りて、上の薄衣と、長襦袢の間
 を照して、模様の花に、葉に、莖に、裏透きてすらくと移るに
 こそあれ。あゝ、下じめよ、帯よ、消えて又光る影、乳に沁むな
 り。此の君、其の肌、確に雪。ソロモンと榮華を競へりとか、
 白百合の花も恥づべき哉。否、恥らへるは夫人なり。衣紋明るく

こころづ
心着きけむ、銀に青海波の扇子を半、螢より先づハツと面を
おほ
蔽へるに、風さらくと戦ぎつゝ、光は袖口よりはらりとこぼ
れて、窓外の森に尚美しき影をぞ曳きたる。もし魂の拔出で
たらんか、これ一顆の碧眞珠に、露草を鏝れるなるべし。
こひと
此の人もし仇あらば、皆刃を取つて敵を討たん。靈山の氣、汽
しや
車に迫れり。——山北——山北——

しちぐわつ
七月

そ
其の邊の公園に廣き池あり。時よし、風よしとて、町々よ
すゞみ
り納涼の人出で集ふ。童たち酸漿提灯かざしもしつ。水の灯

うつくよる 美しき夜ありき。みぎはちひさふねうか 汀にみぎはちひさふね 小うか船を浮べて、水茶屋みづぢややのこ小こ奴やつこ莞爾にこや
 かに竹たけぎを棹かまを構へたり。うら若わかき母は、ともなに伴をさなごはれし幼ひと兒の、他の乗
 るに、われもとて肯きかざりしに、私わらはは身弱みよわくて、恁かばかりの船ふねに
 も眩暈めまひするに、荒波あらなみの海うみとしならばとにかくも、池いけの水みづに伏ふさ
 んこと、人目恥ひとめはづかしければ得乗えのらじとよ。強しひてとならば一人行ひとりゆ
 け、心こゝろは船ふねを守まもるべし。舳みよしにな立たちそ、舷ふなべりにな片寄かたよりそ。頼たのむは
 わかせんどうしう 少すき船頭衆せんとうしうとて、さみしく手てをはなち給たまひしが、早はや其その姿すがたへ
 だたりて、残のこんの杜かきつばたもすせしろ 若あし裳うすものむねに白かよく、蘆うすものむねのそよぎ羅かよの胸むねに通かよふと、
 ほしかけ 星みの影かげに見みるまゝに、兒こは池いけのたゞ中なかに、母は、よを呼よびて、わツと泣な
 きぬ。——孟蘭盆うらぼんの墓はかまうで 詣まかまうでに、其そのなき母は、しのを偲しのびつゝ、涙なみだぐみ
 たる娘むすめあり。あかの水みづの雫しづくならで、桔梗ききやうに露つゆを置添おきそへつ、うき

よ
世の波を思ふならずや。

はちくわつ
八月

わか
若きものの、山深く暑を避けたるが、雲の峰高き巖の根に、嘉
はなつ
魚釣りて一人居たりけり。碧潭の氣一脈、蘭の香を吹きて、
ゆか
床しき羅の影の身に沁むと覺えしは、年経る庄屋の森を出でて、
うしろ
背後なる岨道を通る人の、ふとイみて見越したんなる。無地か
おも
と思ふ紺の透綾に、緋縮緬の長襦袢、小柳縺子の帯しめて、
つま
褌の堅きまで慎ましきにも、姿のなよやかさ立ちまさり、打微
ゑ
笑みたる口紅さへ、常夏の花の化身に似たるかな。斷崖の

清水しみづに龍女りうぢよの廟べうあり。われは浦島うらしまの子こか、姫ひめの靈れいぞと見みしが、
 やがて知しんぬ。なか／＼に時ときのはやりに染そまぬ服ふく装さうの、却かへつて
 鶯あう帶たい蟬せん羅らにして、霓げい裳しやう羽衣ういの風情ふぜいをなせる、そこの農家のうかの
 姉あねむすめ 娘むすめの、里さとの伯母おば前まへを訪とふなりしを。

くぐわつ
九月

洪水でみづは急きなりけり。背戸せど續つゞきの寮屋はなれやに、茅屋かややに侘わぶる風情ふぜいと
 て、家いへの娘むすめ一人居ひとりたる午ひるすぎよ。驚破すはやと、母屋おもやより許いひなづけ嫁あにの兄あに
 ぶんの駈かけつくるに、讀よみさしたる書伏ふみふせもあへず抱だきて立たてる、
 葉しの萩はぎも濡縁ぬれえんに枝えだを浪打なみうちて、早はや徒かちわたり渉たすべからず、あり

合あはたらひすなか盥たすの中なかに扶たすけのせつゝ、盪おして逃のがるゝ。庭にははさながら花野はなの
 也なり。桔梗ききやう、刈萱かるかや、女郎花をみなへし、我亦紅われもこう、瑠璃るりに咲さける朝顔あさがほ
 も、弱竹なよたけのまゝ漕惱こぎなやめば、紫むらさきと、黄きと、薄藍うすあゐと、浮うきまど
 ひ、沈しづみ靡なびく。濁にごれる水みづも色いろを添そへて極彩色ごくさいしきの金屏風きんびやうぶを渡わた
 が如ごとく、秋草あきくさもやう模様つゆしに露そで敷せく袖せとかは、丈高せたか紫苑しをんの梢こずゑを乗のりて、驚おどろ
 き飛とぶ蝶てふとともに漾たゞよへり。山影やまかげながら颯さつと野分のわきして、芙蓉ふように咽むせ
 ぶ浪なみの繁吹しぶきに、小ちひき輪さりんの虹にじが立たつ——あら、綺麗きれいだこと——それ
 どころかい、馬鹿ばかを言いへ——男をとこの胸むねは盥たらひに引添ひきそひて泳およぐにこそ。
 おゝい、おゝい、母屋おもやに集つどへる人数にんずの目めには、其その盥たらひたゞ一枚いちまい
 おほい、れんげしろはな
 大なる睡蓮れんげの白しろき花はなに、うつくしき瞳ひとみありて、すらくと流れ寄よ
 りきとか。

十月
じふぐわつ

あゝ 藍あさき宵よひの空そら、薄うす月つきの夜よに入りて、雲くもは胡粉ごこんを流ながし、一ひとむ
 ら雨さめ廂さしなを斜なめに、野路のぢの刈かる萱かやに靡なびきつゝ、背戸せどの女郎をみなへし花はは露つゆま
 さる色いろに出いで、茂しげれる萩はぎは月影つきかげを抱いだけり。此この時とき、草くさの家やの窓まど
 に立たちて、秋深あきふかくものを思おもふ女をんな。世よにやくねれる、戀こひにや惱なやめる、
 避暑ひしよの頃ころよりして未いまだ都みやこに歸かへらざる、あこがれの瞳ひとみをなぶりて、
 風かぜの音おとづ信しなるともあらず、はらくくと、櫛はじの葉は、柿かきの葉は、銀杏いてふの葉は、
 見みつゝ指ゆびの撓しなへるは、待まち人びとの日ひを算かぞふるや。爪つま紅まへを其そのまゝ
 に、其その木きの葉は一枚いちまいづゝ、君きみ來こよ、と染そむるにや。豈あにひとり居きよ

に堪ふべけんや。袖笠かつぎもやらす、杖折戸を立出づる。山の根の野菊、水に似て、渡る棲さき亂れたり。曼珠沙華ひら／＼と、其の左右に燃えたるを、あれは狐か、と見し夜戻りの山法師。稲束を盾に、や、御寮、いづくへぞ、とそゞろに問へば、莞爾して、さみしいから、田圃の案山子に、杯をさしに行くんですよ。

じふいちぐわつ
 十一月

朝の雲吹散りたり。風凧ぎぬ。藪垣なる藤豆の、莢も實も、午の影紫にして、谷を繞る流あり。穂たで露草みだれ伏す。此

の水みづやがて里さとの廓くわくの白粉おしろいに淀よどむと雖いへども、此このあたり、寺てら々々
まつ おとの松まつの音おとにせゝらぎて、殘菊ざんぎくの雫しづ潔ぎよし。十七じちばかりのもの洗あらふ
をんなおひほそ こしよわ女をんな、帶おび細ほそく腰こし弱よわく、盥たらひを抱かへて來きつ。汀なぎさに裂さけし芭蕉ばせの葉は、日ひざ
かざ あふぎ なしに翳かざす扇あふぎと成ならずや。頬ほも腕かひも汗あせばみたる、袖そで引ひき結ゆへる古ふるだ
すき襷すきは、枯野かれのの草くさに褪あせたれども、うら若わかき血ちは燃もえんとす。折をり
はじ しんくから櫛はじの眞紅しんくなるが、其そのまゝの肌はだ着ぎに映うつりて、竹たけ堰せきの脛はぎは霜しも
しを敷しく、あゝ、冷つめたからん。篋かけの水みづを受うくるとて、嫁菜よめなの莖くき一つ
ひき摘つみつゝ、優やさしき人ひとの心こころかな、何なんのすさみにもあらで、其その盥たらひに
ひなたさしけるが、引ひきとき衣ぎぬの藍あゐに榮はえて、嫁菜よめなの淺葱あさぎ色いろ冴さえしを、
なばたけ菜なばたけ畠はたけの日南ひなたに憩いこひて、恍くわう惚うと見みたる旅たびの男をとこ。うかと聲こゑを掛か
むねけて、棟むねあちこち、伽藍がらんの中なかに、鬼き子し母ぼ神じんの御寺みてらはと聞きけば、え

、
紅^{あか}い石榴^{ざくろ}の御堂^{おだう}でせうと、
瞼^{まぶた}に色^{いろ}を染^そめながら。

大正十二年一月—十一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「婦人十一題《ふじんじふいちだい》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

婦人十一題

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>